

夢幻視物語におけるパラダイス描写の視点について

壬生, 正博
福岡歯科大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1955347>

出版情報 : 総合文化学論輯. 2, pp.1-25, 2015-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン :

権利関係 :

夢幻視物語におけるパラダイス描写の視点について*

壬生 正博

はじめに

小論は、広範な異界研究の中から、特にパラダイス描写に焦点を絞り考察を試みる。夢や幻視を題材とした作品群 (dream-visions) ——便宜上、夢幻視物語と記す——が、文学のひとつのジャンルとして確立するのは 6 世紀後期である。この頃の代表的なものに Gregory the Great (*Dialogues*) が記す修道士 Peter、貴人 Stephen、一人の兵士の物語、そして Gregory of Tours (*History of the Franks*) による St. Salvius の物語等があり、これらは後の夢幻視物語の創作規範となった。このジャンルは、12 世紀に最盛期を迎え、やがて Dante の *La Divina Commedia* へと受け継がれた。

夢幻視物語における筋の展開は、時代を通じて類似性を持っている。主人公はまず夢や幻視を媒体として、地下の陰惨な暗い世界へ迷い込む。そこでは罪人たちが悪魔たちに拷問され、地下の最下層には魔王ルシファーが棲む。異界にいる主人公は、天使あるいは聖人に守護されつつ教示や啓示を受ける。そして、暗黒の世界を過ぎると、光溢れる華やかな世界、パラダイスが眼前に広がる。主人公はこの地で神の栄光に触れ、その後、元の世界へ戻ると目を覚まし、神に忠実な生活を送り昇天する。

小論では、12 世紀頃の代表的な諸作品を取り上げるが、原典はラテン語で書かれているので、中英語研究の観点から、14～15 世紀頃の中英語翻訳テキストを使用する。即ち、① *St. Patrick's Purgatory* (Auchinleck MS. 19.2.1)、② *The Revelation of the Monk of Eynsham* (B.L. MS. IA. 55449)、そして③ *The Vision of Tundale* (B.L. MS. Cotton Caligula A II) のテキストを主に用いるが、必要に応じて他の中英語版、ラテン語版等にも言及するつもりである。上記三作品を扱う理由は、パラダイスの異なる形態を記しているからである。① は二層形態のパラダイス (地上のパラダイスと天のパラダイス)、② は三層形態のパラダイス、そして ③ は地上のパラダイスと七層形態の天のパラダイスを描いている。パラダイス描写には、共通する要素もあれば異なる要素もあり、それぞれに独自のパラダイス観を呈している。小論では、これらの作品におけるパラダイス描写の視点

*この論文は、2012 年 6 月 9 日 同志社大学 (今出川キャンパス) で開催された日本中世英語英文学会 第 28 回西支部例会において口頭発表をした原稿に加筆修正を加えたものである。

がどこにあるのかについて比較検討を試みる。

I. 中世社会の特殊性とパラダイス観

1. 時代的特殊性

まず初めに、中世という時代の特异性について触れておきたい。Carolly Erickson は、以下のように述べている。

The medieval past is full of visions. Extraordinary appearances—unusual natural configurations, visual portents, dream messages from the dead, divine and infernal warnings, intellectual illuminations, visions of the future—everywhere complemented ordinary sight. Chroniclers wove the visionary miraculous into the pattern of their histories, and the world they described was thick with noncorporeal beings and superphysical events. Visionary metaphors were the common vehicle for many kinds of formal writings, and the multifold reality of allegory and apocalyptic literature was familiar ground to the men and women of the twelfth, thirteenth and fourteenth centuries. ¹⁾

(中世という過去はヴィジョンに満ちている。異常な物体の出現、すなわち自然物の異常な現れ方、目に見える前兆、死者からの夢によるメッセージ、神や地獄からの警告、知的啓明、未来のヴィジョンなど、肉眼による視覚を補うものが至る所にあった。年代記作家は、ヴィジョン体験者の奇跡的出来事を綴る。彼らの記す歴史的記述には、そうした出来事が模様のように織り込まれている。年代記には、形のない物体や物質界では不可能な出来事についての記述があふれている。ヴィジョンを用いた比喻は、さまざまな折に記される正式な書式のなかにすまみられ、これはありふれた修辭的技法であった。寓喩や黙示文学のなかで現実として描かれるさまざまな出来事は、一二、一三、一四世紀の人々にとってはごく馴染みのあるものだった。)²⁾

このように”vision” (幻視) には、現実的な世界とは異なる世界、つまり、異界が描かれている。小論で扱う作品は夢や幻視を題材としている。従って、当時よりも遙かに自然科学が進んだ現代社会に住んでいる我々が、中世という時代に接する場合、現代の常識をそのまま適用するわけにはいかない。なぜなら、現代の我々にとって極めて非常識なものも、中世という時代のフィルターにかければ、至って日常的で馴染みの深いのもだったと思われるからである。こういった観点に立つと、小論で取り上げるパラダイスも、中世の人々

¹⁾ Carolly Erickson, *The Medieval Vision: Essays in History and Perception* (New York: Oxford Univ. Press, 1976), p.30 を参照。

²⁾ 武内真一・多ヶ谷有子・石黒太郎 訳『中世びとの万華鏡：ヨーロッパ中世の心象世界』(東京・評論社, 2004), p.52 を参照。

にとっては極めて現実的なものであり身近に感じられていた事象の一例と位置づけることができる。

2. 教会や修道院などに見るパラダイス観

Callam は、中世社会の実生活におけるパラダイス観に言及している。教会の入り口は"a veritable portal of paradise"³⁾ であり、聖地エルサレムへの初期巡礼は、"the parallel to heaven"⁴⁾ であった。また、贖罪行為としての困難な旅も"entrance into paradise"⁵⁾ で、聖戦としての十字軍は"to assure an immediate entry into heaven for those who died in battle"⁶⁾ であったという。これに加えて、Hand-Werner Goetz によると、修道院生活は、地上での天の実践であった。例えば、クリュニーの Odo (878-942) は、彼の著作 *Collationes* の中で、修道院制度について言及しているという。Odo にとって修道院制は、"Verwirklichung der Pfingstkirche"「聖霊降臨教会の顕在化」、"Hinausschreiten über die Welt hinaus"「世俗を超越したもの」、"Heimkehr in den Urzustand des paradiesischen Lebens"「原初的パラダイスの生活への回帰」、"Vorwegnahme und Verwirklichung des ewigen Friedens"「永遠の平和の実現と先取り」であり、それ故、修道院生活は"engelgleiches Leben"「天使の如き生活」であった。⁷⁾ そして、修道士たちのゆったりとした衣服については、智天使ケルビムの翼に喩えていると Goetz は指摘している。⁸⁾ また、ステンドグラスがはめ込まれたゴシック様式の荘厳なる大聖堂は、"heaven on earth"⁹⁾ でもあった。

目を転じて、イギリスのヘレフォード大聖堂 (Hereford Cathedral) 所蔵の 13 世紀後期の作といわれる世界地図 (Mappa Mundi) を参照すると、北を上方に配置する現代の地図とは全く異なり、東を上方に配置している。何故なら、聖書によれば、東はエデンの園 (Gen.2:8) の位置する聖なる方位だからである。そして、東に位置するパラダイスは、地図上方にあるアジアの最東端の燃え盛る壁に囲まれた孤島になっている。¹⁰⁾

3. 語彙から見るパラダイスのイメージ

³⁾ "PARADISE, WESTERN CONCEPT OF", *Dictionary of the Middle Ages*, ed. Joseph R. Strayer (New York: Charles Scribner's Sons, 1985), vol.9, p.396 を参照。

⁴⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.396 を参照。

⁵⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.396 を参照。

⁶⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.396 を参照。

⁷⁾ Hand-Werner Goetz, *Leben im Mittelalter* (München: Verlag C.H.Beck, 1994), p.101 を参照。

⁸⁾ Goetz, *Leben im Mittelalter*, p.101 を参照。

⁹⁾ McDannell and Lang, *Heaven: a History* (New Haven and London: Yale University Press, 1988), p.79 を参照。

¹⁰⁾ P.D.A.Harvey, *Medieval Maps* (The British Library, 1991), pp.19-37 を参照。

ここでは、*Middle English Dictionary* (以下、*MED*と略す)¹¹⁾の"paradise"の語義を取り上げて語彙の面から輪郭を把握する。*MED*は"paradise"の語義について諸種の語義を挙げているが、本研究と関わる次項を挙げると以下のとおりである。

"paradis(e)" n.

1.(a) The Garden of Eden;

(b) **court of ~, ertheli ~, ~ greve, ~ of god, ~ terrestre, paradises riche,** the Garden of Eden;

(c) an eastern land sometimes identified with (a); **ertheli ~, ~ terrene (terrestre, terrestrial),** earthly paradise;

(d) **ertheli ~, ~ terrestre,** an intermediate place between purgatory and heaven, where Christ was between his resurrection and ascension;

2.(a) The Christian heaven;

(b)省略

(c) **blisse (joie) of ~, paradises blisse,** the state of heavenly bliss; **cite of ~,** the heavenly city;...; **~ gates,** the gates of heaven;...; **heuenli ~ erde, paradises riche,** the heavenly kingdom;

この語義 1.は、地上の物理的なパラダイスを示している。特に 1.(a)と 1.(b)は、エデンの園を表しており、*Genesis* の流れを受けた語義である。1.(c)は、地上のどこかにあると考えられた地上のパラダイスである。1.(d)は、煉獄と天界の中間に位置する場所であることがわかる。次に 2.(a)の範疇は、いわゆるキリスト教の天国で、霊的な場所の概念も含んでいる。2.(c)の"the state of heavenly bliss"は、天界の至福に充たされた精神状態を包含している。なお、"bliss"は、夢幻視物語のパラダイス描写と関連の強い語のひとつである。これらの点から、中英語における"paradise"には、地上と天界という場所概念、そして至福という精神状態の両面を含んでいることが理解できる。

4. St. Augustine と Thomas Aquinas の天界観

Saint Augustine (354-430)は、"haeven"の至福は"beatific vision" (至福直観) にあると考えた。至福直観とは、"seeing God face to face, and loving and praising him forever"¹²⁾ というように、神を直に見ることから生じる究極の至福である。この至福直観には無尽蔵の"happiness"が伴うが、死者は復活の日まで不完全にしかこの至福を体験できない。

13 世紀のスコラ哲学者でローマカトリック教会の神学者でもあった Thomas Aquinas (1224-1274) は、中世を代表する大思想家である。中世の神学者たちは、天の構成要素を

¹¹⁾ Sherman M. Kuhn, ed., *Middle English Dictionary* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1981), Part P.1, pp.592-594 を参照。

¹²⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.395. を参照。

「火」と考えたが、Aquinas はそれを否定して"a fifth element that was 'the most luminous and noblest material'"¹³⁾ という自然界には存在しない第五元素を考えた。この第五元素はこの物質の完全性に由来し、"immobility, incorruptibility, universal homogeneity, uniform luminosity"¹⁴⁾ といった天界の特殊な性質を持つ物質である。Aquinas も至福直観の思想を継承したが、彼はそれを Aristotle に由来する人間の至福の哲学と結びつけて、"final cause" (究極原因) を提唱した。¹⁵⁾ そして、本質的に至福に付随するのは"delight" (喜び) と"permanence" (永久性) であり、Aquinas は後者を重視した。¹⁶⁾

このように、"beatific vision"という観念は、St. Augustine と Thomas Aquinas の両者にとって重要なキーワードである。つまり、パラダイス描写と至福直感は極めて密接な関係にあることが理解できる。

以上のように、中世キリスト教社会において、パラダイスの存在は、現代の我々の想像が及ばないほど身近に感じられていたと推察される。パラダイスに対して聖書的にも言える中世社会のこのような生活空間の中で、地下世界やパラダイスという異界を題材とした多くの文書が創作されたのは、自然な流れであっただろう。

以上の諸点を前置きとして呈示し、以下に具体的な作品を取り上げて、当時のパラダイス描写の特質を考察する。

II. 夢幻視物語におけるパラダイス描写について

本章では異界描写の宝庫とも言える作品群① *St. Patrick's Purgatory*、② *The Revelation of the Monk of Eynsham*、そして③ *The Vision of Tundale* のパラダイス描写に付随する特に至福直感に焦点をあてて、どのような文脈の中で記されているかを考察したい。この試みによって、夢幻視物語におけるパラダイス描写の視点が見えてくると期待できる。

1. *St. Patrick's Purgatory* のパラダイス描写について

St. Patrick's Purgatory の原典は 12 世紀のラテン語散文 *Tractatus de Purgatorio Sancti Patricii* である。この作品は創作されて以来、三世紀にわたって広く翻訳され人気

¹³⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.397 を参照。

¹⁴⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.397 を参照。

¹⁵⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.397 を参照。

¹⁶⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.397 を参照。

を博した。¹⁷⁾ この *Tractatus* を原典とする騎士 Owein の物語には、以下の三種の中英語訳テキストがある。¹⁸⁾

- ① 'St Patrick': これは 13 世紀後期の南部英語伝説集の中のテキスト
- ② *OM1*: これは *Owayne Miles* として知られる翻訳のひとつで、14 世紀初期の写本 Auchinleck (スコットランド国立図書館所蔵) の中のテキスト
- ③ *OM2*: これは *OM1* の後の翻訳で、14 世紀後期もしくは 15 世紀初期の写本 Cotton Caligula A ii (ロンドンの大英図書館所蔵) と Yale University Library MS 365 (イエール大学図書館所蔵) の中のテキスト

ここでは主に *OM1* (Auchinleckh 版) を取り上げ、必要に応じて、ラテン語版も参照する。¹⁹⁾

OM1 は 198 連から成る六行尾韻詩 (総行数 1188 行) で、煉獄の描写が約 438 行で全体の約 36,8 %、パラダイスの描写は約 360 行で全体の約 30,3 % が充てられており、このことから *OM1* では煉獄とパラダイスの描写に意が注がれていることがわかる。

以下に *OM1* を基に粗筋を述べる。

St. Patrick はアイルランドの人々の不信仰を改悛させようと教会で神に祈りを捧げる。祈りの途中、St. Patrick は眠りに就き夢をみる。すると神 (Jesus Christ) が顕れて、Patrick を荒涼たる砂漠へ連れていく。そこに煉獄へ続く恐ろしい入り口があり、神は罪深き者はここで浄化されるまで苦しまなければならないと告げる。夢から醒めた Patrick は神の啓示に感謝し、煉獄への入り口がある場所に修道院を建立し人々の改心に努めた。

イングランド最北部のノーサンバランドに Owein という名の一騎士がいた。彼は自分の罪を浄化すべく St. Patrick の修道院へやってくる。Owein は煉獄に入り魂の浄化を申し出るが、St. Patrick は反対する。しかし、Owein の熱意に押され、Patrick は許可する。Owein は 15 日間の断食と祈りを行い煉獄の中へ入り、真っ暗な道を進むと石造の大広間に辿り着く。この広間で 13 人の聖人たちが、彼に揺るがぬ信仰を持ち神の名を呼べば、悪魔たちの害は及ばないと教示した。そして Owein は大広間を後にする。

大広間を出るとたちまち悪魔の群衆が押し寄せてきた。そして Owein の煉獄での様々な苦悩や試練が始まる。しかし、彼は堅固な信仰心を持ち、種々の傷を受けながらも神の恩寵により難を逃れ、悪魔の誘惑やまやかしに堪え忍ぶ。こうして彼は騎士から聖人へと次第に成長する。

¹⁷⁾ Robert Easting, ed., *St Patrick's Purgatory* (Oxford: Oxford University Press, 1991) EETS 298, p. xvii を参照。

¹⁸⁾ Easting, *St Patrick*, p. xix を参照。

¹⁹⁾ ラテン語テキストは、Easting, *St Patrick's Purgatory* に集録された版を用いた。

Owein は、パラダイスへ通じる橋を地獄に落下することなく渡り終えると、神は黄金の衣服を彼に授け、Owein のすべての傷を癒す。そして彼はパラダイスの中で、ふたりの司教たちに案内されながら素晴らしい光景や樂園の喜びに触れる。その後、Owein は無事に帰還すると聖地巡礼へ旅立ち、その後再びアイルランドに帰国するとこの地で7年間の布教活動を行い、その後天国へと召された。

以上が粗筋である。次に具体的な諸例を挙げながら考察する。

1. 1 天のパラダイスの光輝

異界にいる騎士 Owein を案内しているふたりの司教たちは、彼に "Whe }er heuen were white or biis, / Blewe or rede, =alu or grene" 「天界は白だったか、灰色だったか、それとも青、赤、黄、もしくは緑だったか」(180:3-4)と尋ねる。そして Owein は、"it is a }ousandfold / Bri=ter }an euer was ani gold" 「天界は、いかなる黄金よりも千倍も輝いています」(181:1-2)と答える。Owein のこの答えに対して、司教たちは以下のように言う。

"=a," seyð }e bishop to }e kni=,
"}at ich stede, }at is so bri=,
Nis bot }e entre.

(181:4-6)

「その通りだ」司教が騎士に言った、
「この地は、入り口のみならず
すべてが光に充ちあふれている。

このように天のパラダイスは光輝いている。なお、ラテン語版では、Owein は "Auro mihi simile uidetur ardentis in fornace"²⁰⁾と答えており、パラダイスは燃え盛る炎のような黄金のイメージを持っている。

1. 2 天上のパラダイスから降りそそぐ命の糧

天のパラダイスの門から、地上のパラダイスにいる魂たちに日々の食事が与えられる。これについてふたりの司教たちは以下のように語った。

And ich day ate gate o si }e
Ous come }a mele to make ous bli }e,
}at is to our biheue:
A swete smal o al gode,
It is our soule fode.
Abide, }ou schalt ous leue.'

(182:1-6)

Anon }e kni= was war }ere,

上空の天の門から、日に一度、
我々の善の報酬として
幸福をもたらす食事がおりてくる。
それは善の甘美な香りを発散している。
つまり、我々の魂の食物なのだ。
待っていなさい、すぐにわかる」

すると騎士は、天の門から

²⁰⁾ Easting, *St Patrick*, p.144 を参照。

Whare sprong out a flaumbe o fer,
 Fram heuen-gate it fel.
 Je kni=t Jou=t, al fer and nei=e
 Jer ouer al paradis it flei=e,
 And =af so swete a smal.
 (183:1-6)

炎が、突如、吹きだして、
 落ちてくるのに気がついた。
 そのとき騎士はこう思った、
 炎は馨しいしい香りを放ちながら、
 パラダイスの隅々まで飛びまわった、と。

Je holy gost in fourme o fer
 Opon Je kni=t li=t Jer,
 In Jat ich place;
 Jurth vertu of Jat ich li=t
 He les Jer al his erJelich mi=t, オウエインの俗界の虚勢は消え失せた。
 And Jonked Godes grace.
 (184:1-6)

聖霊が炎の姿となって
 騎士の上に舞い降りた
 騎士がいるまさにその場所に。
 すると炎の光の御力によって、
 彼は神の恵みに心から感謝した。

この記述から、炎の姿をした聖霊が発する光そのものに特殊な効能があることが理解できる。

以上のように天のパラダイスには光の描写がひとつの重要な特徴を成す。この点は、他の作品にもあてはまる。

1. 3 神の饗宴

以下の記述は、天にいる者たちが経験する至福直観を主題としている。記述中に光の描写はないが、既に述べたことと関連づけるならば、その場所は光に充ちた場所であることを前提とすべきであろう。

Jus Je bishop to him sede,
 'God fet ous ich day wi] his brede,
 Ac we no haue noure nei=e
 So grete likeing of his grace,
 No swiche a si=t opon his face,
 As Jo Jat ben on hei=e.
 (185:1-6) (下線は筆者)

司教は再びオウエインに言った、
 「神は、日々、我らにパンを与えて下さる。
 だが、我々は、天界にいる方々ほど
 神の絶大なる恵みの喜びを得ることも、
 神のご尊顔を拝することも、
 ここではできないのである。

次の一節も至福直観の概念に一脈通じる内容を持つと思われる。

Je soules Jat be] at Godes fest,
 Jilche ioie schal euer lest
 Wi]outen ani ende.
 (186:1-3)

神の饗宴に同席する魂たちは、
 永遠に至福が続くであろう
 いつまでも終わることなく。

この一節は、神と共に祝宴を楽しむ魂たちの無上の喜びを謳っている。即ち、神を直接見

ること事こそ最高の至福である。

以上のように、天のパラダイスには光が溢れ、神と共に生きている者たちは至福直感を享受している。そして、天から降りてくる聖霊が、地上のパラダイスにいる人々の食事、即ち命の糧となっている点は注目すべきであろう。

2. *The Revelation of the Monk of Eynsham* のパラダイス描写について

ここでは、*The Revelation of the Monk of Eynsham* におけるパラダイス描写に関して考察を行う。テキストには、15 世紀の中英語訳散文テキスト IA. 55449 版（ロンドンの大英図書館所蔵）を主軸に置いて考察を行い、必要に応じて、同じく 15 世紀の中英語訳散文テキスト Auct. 1Q. 5. 28 版（オックスフォードのボドレイアン図書館所蔵写本）、あるいは 12 世紀中庸のラテン語散文テキスト Seldem Supra 66 版（ボドレイアン図書館所蔵写本）も参照する。²¹⁾

IA. 55449 版は、全 58 章から成り、総行数は 2,988 行である。この内、煉獄については約 35 章（14 章–48 章、1,947 行、約 65%）、パラダイスについては約 9 章（49 章–57 章、405 行、約 13%）が充てられており、物語全体の構成からみるとパラダイスの描写の割合は非常に少ない。だが、本作品のパラダイス描写には他の作品とは異なる多くの特筆すべき点が含まれている。

まず、物語の粗筋を以下に呈示する。

本作品は、Richard I の統治時代の 1196 年、復活祭前の聖木曜日から聖土曜日の間、神が St. Nicholas を遣わし、若き修道士 Edmund に啓示した幻視を彼の兄弟 Adam が筆記したという物語である。

敬虔な修道僧 Edmund は、長い間、難病を患っていた。ある日、Edmund は目の前に現れた St. Nicholas に手を引かれ導かれると、身体感覚がなくなり恍惚状態になった (620-29)。Edmund の同胞たちは、彼が死んだと思っていたが、Edmund の魂は、この間、幻視の中で St. Nicholas に案内されて煉獄やパラダイスを探訪していた。

煉獄は三つの領域に分かれている。第一の煉獄では、微罪を犯した物たちが責め苦しみに喘いでいるが、彼らはいつか永遠の祝福(652)を得る希望を抱いている。Edmund はここで司教、大修道院長、裁判官、その他の高位聖職者たちに出会った。第二の煉獄に堕ちた魂たちは、第一の煉獄よりも激しい苦しみを受けている。そこには雲にとどかんばかりの高い山があり、山の一方の側は燃え、もう一方は凍っているように寒い。その向こう側には暗く深い谷と悪臭を放つ池がある。罪人の魂は、悪魔たちに山の暑さと寒さで苦しめられ、

²¹⁾ 各テキストは Robert Easting, ed. *The Revelation of the Monk of Eynsham* (Oxford: Oxford University Press, 2002) EETS, O.S. 318 を使用した。

ある者は、悪臭の池にも浸けられている。第三の煉獄の罪人たちは、極限の塗炭の苦しみに煩悶している。そこは虫けらがあふれ、悪魔たちが同性愛などの重罪を犯した魂たちを引き裂いたり、魂たちを溶かしては元の姿に戻して永遠に苦しめていた。その後、Edmund と St. Nicholas は、煉獄を過ぎるとパラダイスへたどり着く。

Morgan は、本作品のパラダイスについて下記のように三領域に分けている。

In the first stage, the blessed rejoice in a flowery field before a vision of Christ on the Cross.... The second Paradise is a garden enclosed by a crystal wall in which steps are cut; from the summit of this wall, where the enthroned Christ is adored, the ascent may be made to a third area, the 'heaven of heavens where the just rejoice in the presence of God'...; this we are not shown.²²⁾ (下線は筆者)

パラダイスのこの三分割は、我々に Paul が昇った第三天の思想 (2Cor.12:1-4) を想起させる。もちろん、本作品が Paul の体験から物語の発想を得たとも言えるが、修道士 Edmund の幻視は、全くの創作ではなく Paul の追体験とも考えられる。

以下、パラダイスの内部の注目すべき要素について考察する。

2. 1 第一のパラダイス

主人公 Edmund と St. Nicholas が地獄の苦しみの地を過ぎると、向こうに光が見えてきた。そこは、上記の Morgan の区分に従えば、第一のパラダイスである。Edmund がやってきた場所には、煉獄で浄化を終えた大勢の魂たちがいた。しかし、彼らにはまだ鮮やかな輝きはなかった。

Sothely, in thys fylde we sawe and founde infynyte thousandys of sowlys ful iocunde and merye in a ful swete reste after her penauns and after her purgacyon. And hem that we founde firste in the begynnyng of that filde had apou hem white clothyng, but hyt was not very bryght nethyr wele schynyng. Nothwithstondyng, they had no spotte of blacknes or of any other onclennes on hem, as hyt semyd, saue thys, as Y seyde before, they were not very bryght schynyng whyte. (2547-54)

(確かに私たちはこの野原で、無数の人々が贖罪と浄化の後にとても心地よく歓喜しているのをみた。この野原のはじめにいた人たちは純白の衣装を身につけていたが、輝くほどに明るい衣装ではなかった。それにもかかわらず、かれらの衣装には黒い汚れやしみなどはみあたらず、しかし、輝きを放つほどの白さではなかった。)

このようにここにいる魂たちの衣服は、輝きを放つほど白くはなかった。従って、靈魂の

²²⁾ Alison Morgan, *Dante and the Medieval Other World* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1990), p.184 を参照。

浄化状態の度合いは、彼らが着用している衣類の輝く白さによって判断できる。第一パラダイスは、魂たちの「白さ」が主たるテーマとなっている。この点から「純白の衣装」に着目すると、Vries は"white"の色彩のイメージアリーを 20 項目に分類しているが、その中から特に上に引用した一節と関連があると思われる 1. を呈示したい。

1. *purity, chastity, temperance, virginity* : a. in the N.T. a white raiment often signifies immaculate, heavenly delight; e.g. Christ's clothes when he rose from the dead, the reward for a good life in Rev. (3, 4f., etc.)²³⁾ (下線は筆者)

この解説からわかるように、Edmund がやってきた場所には、煉獄で浄罪を終えて"purity"を具備した魂たちがいると言えよう。そして、この魂たちが着ている白い衣装は、まさに"heavenly delight"の象徴である。しかし、彼らの衣装はまだ"not very bryght schynyng whyte"「輝きを放つほどの白さではない」(2554)ことから、彼らの天の喜びは、まだ低い度合いだと言うべきであろう。

第一パラダイスでは、"ther were more whyttur and gladder than were othyr that we saw before"「前に私たちが見たものより白さが増し喜びも増した」(2729-39)というように、主人公がどんどん先に進むにつれて周囲の白さや喜びが増す。先ほど言及した Vries の"white"²⁴⁾の項目 2.には"perfection"が挙げられており、この観点から、上記の"whyttur (=whiter)"に着目すると、Edmund と St. Nicholas はより完全なパラダイス、つまり神の住む聖地へ次第に近づきつつあると推察できる。

2. 2 第二のパラダイス

第一パラダイスの十字架の門をくぐって第二のパラダイスに入った Edmund が見た鮮烈な光の描写は、前項で取り上げた記述よりも印象的である。

...and the crosse was lyfte vppe, and so Y cam in. But what brightnes and clerenes of light was there wihin-forthe al aboutys, no man aske ne seche of me, for Y can-not only telle hit by worde, but also Y can-not remembre hit in mynde. That glorious schynyng light was bryghte and smothe, and so raueshte a man that behylde hit, that hit bare a man aboue hym-selfe by the grete brightnes of lyghte, yn so mekyl that whatsum-euer Y sawe before, hit was as no-thing, me thought, in comparyson of hit. That bryghtnesse, thawghe hyt were inestymable, neuerthesse, hyt dullyd not a mannys syghte, but rathyr scharpyd hyt. (2827-37)
(...十字架が上げられると私は中に入った。するととても明るく清澄な光が辺りじゅうに充ちていた。このことについて私に尋ねないで下さい。なぜなら私は言葉だけで

²³⁾ Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam and London; North-Holland Publishing Company, 1984), p.499 を参照。

²⁴⁾ Vries, p.499 を参照。

その光景を語るなどできないし、心に思い起こすことさえできないからだ。その栄光ある輝かしい光は皓々として平穏で、それを見る人をうっとりさせる。その光の眩いばかりの輝きに誰もが我を忘れることだろう。私は生まれてこのかたこのような華々しい光景を見たことがないし、それと比べられる物など思い浮かばない。その輝きはかけがえなく貴重であった。かといって、その光は人の目を眩ませることはなく、むしろ視力をはっきりさせた。))

第一のパラダイスでは、白さによって場所の様子が描かれていたが、第二のパラダイスは、上記のように、光にスポットがあたっている。その輝かしい光は、目を眩ませることなくむしろ視力をはっきりさせた。光は単に視力を刺激するものではなく、魂に活力を与える作用をしている。

Edmund がくぐり抜けた門の内側には、美しい「梯子」が取り付けられていた。この梯子は遙か上空にある第三のパラダイスへと伸びていた。以下は、この第三パラダイスの注目すべき三つの事項—梯子、主キリストの玉座、そして神がいる至高天—について述べる。

2. 3 第三のパラダイス

梯子の描写

第二のパラダイスの壁に取り付けられている梯子は、第二と第三のパラダイスを分ける機能を持つ。魂たちはこの梯子を登って天上のパラダイスへ向かうが、下記の記述が示すように、彼らは何の苦もなく登り、しかも登るにつれて喜びが増している。

...fro the gronde vppe to toppe of that walle were grycis, ordende and dysposyd feyre and meruelusly, by the whyche the ioyful company that was cum yn at the forseyde gate gladly ascendyd vppe. Ther was no labur, ther was no difficulte, ther was no taryng yn her ascendyng, and the hier they wente, the gladder they were.

(2841-48)

(...大地からその壁の頂上までのびる梯子があり、その美しい造形に息を奪われた。この梯子のそばに喜びに充ちあふれた一団がやってくると、この門を歓喜しながら昇りはじめた。彼らは労力も困難も遅れることもなく梯子を登り、高く昇ればのぼるほど、彼らの喜びは次第に増した。)

この梯子の記述は、もちろん"Jacob's ladder"(Gen.28)の伝統を踏襲していると思われる。Jacob の梯子について、Peter Sterry の解説を参照にすると、この梯子は以下のように神の調和と均衡を表していたことがわかる。

Being it self, in its universal Nature, from its purest heighth, by beautiful, harmonious, just degrees and steps, *descndeth* into every Being, even to the lowest shades. All ranks and degrees of Being, so become like the mystical steps in that

scale of Divine Harmony and Proportions, *Jacobs Ladder*. Every form of Being to the lowest step, seen and understood according to its order and proportions in its descent upon this Ladder, seemeth as an *Angel*, or as a Troop of Angels in one, full of all Angelick Music and Beauty.²⁵⁾

更に、Robert Hughes によれば、中世思想において梯子は道徳的進歩を表象する完全性へ至る階梯の象徴であり、その他に、梯子は死後の魂の善・悪が判断される試練の機能もあった。²⁶⁾ *The Revelation of the Monk of Eynsham* に記された梯子は、審判の試練ではなく、神つまり完全性へ魂たちを昇華させる機能を持っている。ラテン語版でも "superior semper alacrius quam inferior scandebatur gados" 「下の段よりも上の段の方がずっと快適だった」(2499-2500) と記されており、梯子は一段ごとに魂たちを高揚させ、神がいる場所へ向かわせる機能を持っている。

主キリストの玉座

壁の頂上には Jesus Christ の玉座があり、そこに主 Christ が鎮座していた。

And at the laste, as Y lokyd vppe hier, Y saw yn a trone of ioy sitting owre blessyd Lord and Sauyur, Ihesus Criste, yn lykenes of man, and abowte Hym, as hyt semyd to me, were a fyue hondred sowlys, the whyche late had styed vppe to that gloriys trone, and so they came to owre Lorde and worsch[i]lpte Hym and thankyde Hym for Hys grete mercy and grace schewyd and done to hem. (2848-54)

(そしてついに私は壁の上方を見ると、我らの救世主イエス・キリストが人の子の姿をして鎮座する歓喜の玉座が見えた。イエスのまわりには、五百ものたくさんの魂がいるように思えた。彼らはその栄誉ある玉座に向かって昇り、我らが主イエスの御座まで行くと自分たちのためにイエスが成した偉大なる慈悲と恩寵に感謝を捧げた。)

天の玉座は、本来、神を象徴するものであるが、この描写では Jesus の象徴となっている。

上記の描写の中で特に興味を惹くのは、玉座が "a trone of ioy" あるいは "glorious trone" というように喜びや栄光と関連づけられており、喜びや輝きに溢れたパラダイスの様子が強調されている点である。ラテン語版には "trone glorie" 「栄光の玉座」(2503) とのみ記されており、Jesus Christ の栄光に焦点をあてている。また、Jesus の描写に使われた "mercy" や "grace" は神の属性であるが、ラテン語版には見られず、従って、中英語版では神としての Jesus の神性が意識されている。

Edmand は、Jesus がいる場所は意外にも "the hye heuyn of heyuns" 「天の天」(2857)、

²⁵⁾ "Hierarchy and Order," *Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*, Philip P. Wiener, editor in chief (Charles Scribner's Sons, 1968, 1973), p.435 を参照。

²⁶⁾ Robert Hughes, *Heaven and Hell in Western Arts*, (New York : Stein and Day / Publishers, 1968), pp.169-170 を参照。

つまり至高天ではないことを知った。至高天は Jesus がいる場所よりも更に上に存在していた。

至高天

天の天、即ち至高天は下記のように描かれている。

But than from thens, wythowten any hardnes or taryng, they ascende vppe to the hey heuin, the whyche ys blessyd of the syghte of the eueralstyng Godhed, where al only the holy angels and the sowlys of ryghtwes men, that byn of angels perfeccion, seyn the ynuisibl[e] and inmortalle Kyng of al worldys face to face, the whyche hathe only inmortallite, and dwellyth yn lyghte that ys inaccessyble.... (2861-67)

(下線は筆者)

(しかしそこから、いかなる困難もなく、そして遅れることもなく、彼らは高い天へと昇っていく。そこは恒久なる神性の光景によって祝福されている場所である。この天では、聖なる天使、そして天使の完全性をもつ義なる聖人の魂のみが、不可視で不死の王を間近に拝謁できる。神は永遠の命をもち、誰も近づくことのできない光の中に住んでおられる。)

神を謁見できるのは、肉体や魂の道徳的な墮落による嘆きも悲しみもない純潔で汚れなき魂たちのみである。中英語テキスト Auct. 1Q. 5. 28 版ならびにラテン語版 Seldem Supra 66 版の内容もほぼ同じである。上記の至高天についてまず気が付く点は、神を象徴する玉座の記載がないことである。勿論、先述した Jesus Christ の玉座に天界描写の特徴が見られるが、天の概念は、玉座以外の特質によって描写されている。この点につて、上記の記述内容を中心に考察を行う。

まず、"blessyd"、"eueralstyng"、"holy"、"ryghtwes"、"perfeccion"、"ynuisibl[e]"、"inmortalle"、"inmortallite"、"inaccessyble"等の語彙は、神の性質を記したものである。従って、上記の一節は、神自体を描写したものと考えられる。いくつか取り上げると、"eueralstyng Godhed"は神の永遠性を記し、天の天が永遠の世界であることを示している。また、"holy angels"、"ryghtwes men"、"angels perfeccion"等は、神ではなく天使や義人たちの表記であるが、"holy"、"ryghtwes"、そして"perfeccion"はいずれも神の属性を表す語である。

このような文脈の中で"face to face"、つまり神を直に見る至福直観が描かれている。この至高天にやってくる天使や純潔な魂たちは、神の御顔を直に拝することができる。それは、天使や魂たちにとってこの上ない至福の瞬間である。これに類似する記述は他の箇所にも見られる："to see eueralstyngly the gloryous face of oure blessyd Lorde and Sauyur, Ihesu Criste, and oure blessyd Lady, Sent Marye." 「我らが祝福されし救世主と祝福されし聖母マリアの栄えある御顔を永遠に拝謁すること」(2937-39)。そして、上記引用にある

"lyghte that ys inaccessible"とは神の光であり、天界が輝きに溢れている様子がわかる。この光は至高天を照らす明かりである。

Edmund は、梯子を登って上層部の天に行くことはできなかった。しかし、Edmund は、神の姿を見上げて以下のように精神が充足した。

And yn thys vision that Y saw, so mekylle Y conceuyd yn my sowle of ioy and gladnes...and onsufficient to express the ioy of myne hert.... (2870-3)

(そして私が見たこの光景に、私の魂は無上の幸福感をあげた。私はこの心の歓喜を十分に語ることはできない。)

案内役の St. Nicholas は Edmund に再び現世に戻って神を敬って余生を全うするならば、"thow schalt haue and perceue the ioys that thow haste seyne and mekyl more..." 「汝がここで見た喜びよりももっと多くの喜びを手に入れるだろう」(2887-89)と言って Edmund の信仰心を鼓舞した。

Edmund が異界での体験から意識が元に戻って目が覚めると、彼が異界を訪れる前の傷や痛みが以下のように癒されていた。

Trewly, yn the space of hys raueshyng, he was so fully helyd that he hym-selfe meruelyd wyth vs to fele and see the peyne and ache wyth the wownde so clene agonne, that no tokyn of hyt, ne signe of rednes or of whythnes, remaynyd aboue the meruelus curacion of God. (2969-73)

(確かに、エドモンドが恍惚状態にいる間に、彼の病気は完全に癒された。彼のみならず私たち同胞も、彼の傷の痛みがすっかりなくなっているのを知って驚いた。主の奇跡的な治療ゆえに彼の傷跡は消え、赤や白の兆候もすべてなくなっていた。)

このように異界での体験それ自体に主人公の病気を癒す効果がある。それは、神の光の力によるものであろう。

3. *The Vision of Tundale* のパラダイス描写について

The Vision of Tundale は、Eileen Gardiner が指摘しているように、中世社会において極めて著名な作品であり、十三種もの言語に翻訳された。²⁷⁾ Tundale の物語の原典は、アイルランド人 Marcus が創作した *Visio Tnugdali* として知られる 12 世紀中庸のラテン語テキストである。²⁸⁾ 以下の考察では、15 世紀の中英語訳テキスト B.L.MS Cotton Caligula

²⁷⁾ Eileen Gardiner, ed., *Visions of Heaven & Hell Before Dante*, New York: Italica Press, 1989), p.252 を参照。

²⁸⁾ Rodney Mearns, *The Vision of Tundale ed. from B.L. MS Cotton Caligula A II* (Heidelberg, 1985), p.8 を参照。

A ii を主に使用するが、その他の中英語訳テキスト(Advocates' Library 19.3.1)²⁹⁾やラテン語版(MS Bodley 536)³⁰⁾にも言及する。

Cotton Caligula A ii は、8 音節 2 行連句³¹⁾の詩形を用いた韻文である。まず、物語の粗筋を述べる。

アイルランド人である Tundale は、権力があり裕福であったが、高利貸し(usurer)で、³²⁾不道徳な人物であった。ある日のこと、売った三匹の馬の代金を取りに債務者のところに行ったが、その人物は返済金の工面がつかず、憤慨した Tundale は借金の代金を引き上げた。債務者は、Tundale の怒りを静めようと食事に誘うことにした。Tundale はその誘いを受けたが、食卓について食事を一口食べると彼の体は動かなくなり、床に倒れて意識がなくなって死んだ状態になった。周りにいた者たちは、Tundale が息を引き取ったと思ったが、彼の体にはまだ温かみが残っていたので、葬儀を挙げるせずに床の上にそのまま寝かせていた。その間、Tundale の魂は肉体から抜け出し、異界での貴重な経験をしていたのである。その期間は、水曜日の昼から土曜日の朝の 9 時までの三日間であった。³³⁾Tundale は、煉獄、地獄、そしてパラダイスの様子を経験した。この経験の後、Tundale は敬虔な人生を過ごしたのち神のもとへ昇天した。³⁴⁾

以上が物語の粗筋である。中英語散文 Cotton Caligula A ii は、総行数が 2320 行あり、地下の暗黒の世界やパラダイスの記述の割合は以下の如くである。175-1296 行は、Tundale が意識をなくして気がつくとき暗い場所にいたところから地獄の門にたどり着くところまでの煉獄の描写で全体の約 48.3%を占め、1297-1504 行は、魔王 Lucifer がいる奈落の底の記述で約 7%、1505-1541 行は、煉獄での浄化を終えたばかりの人々がいる場所の記述で約 1.6%、そして、美しい平原があるところから Tundale が異界を去ったところまでの 1542-2280 行をパラダイス描写として把握し、ここには全体の約 31.8%が充てられている。本作品のパラダイスの描写は、*St Patrick's Purgatory* や *The Revelation of the Monk of Eynsham* とは異なり、複雑なパラダイスの側面を持っている。

3. 1 Tundale におけるパラダイスの区分

The Vision of Tundale は、主人公 Tundale と天使が「先に進んだ」という表現を境として、まず以下①～④の四つの場所に区分できる。ここでは①～④を地上のパラダイスと

²⁹⁾ William Barclay Turnbull, *The Visions of Tundale; together with Metrical Moralizations and Other Fragments of Early Poetry* (Edinburgh: Thomas G. Stevenson, 1843)を用いた。

³⁰⁾ テキストは Mearns, *Tundale* に集録されているものを使用した。

³¹⁾ Mearns, p.7 を参照。

³²⁾ Tundale の社会的身分はアイルランドの騎士と考えてよい。これについては Gardiner(p.xv)を参照。

³³⁾ Mearns, p.18 を参照。

³⁴⁾ Mearns, p.7 を参照。

して扱う。

地上のパラダイス

- ① 1542-1590 : 善人ではあるが完全に善人とは言えない人々がいる美しい野と生命の泉がある。
- ② 1591-1639 : アイルランドのふたりの王 (Concelere と Danate) がいる。
- ③ 1640-1750 : アイルランドの王 Cormake がいる。
- ④ 1751-1808 : 潔白な結婚生活をおくった正しき夫婦たちがいる。

以下の 1809-2116 は、Mearns の区分けに依拠して七層の天に分ける。³⁵⁾ ここでは⑤～⑪を天のパラダイスとして扱う。

天のパラダイス

- ⑤1809-1826 : 第一天 (Aer) Tundale に近づいて挨拶した聖人たちがいる。
- ⑥1827-1960 : 第二天 (Ether) 金や宝石で造られた壁があり、敬虔な者たちが住む幕屋がある。
- ⑦1961-1986 : 第三天 (Olimphus) 魂たちが楽器を奏でながら聖歌をうたっている。
- ⑧1987-2074 : 第四天 (Firmamentum) 天から光芒が降り注ぎ、大樹があり、その下に天使のように輝く人々が住んでいる。
- ⑨2075-2096 : 第五天 (Celum Igneum) たくさんの宝石で装飾された壁がある。
- ⑩2097-2116 : 第六天 (Celum Angelorum) 天使の九つの序列に沿って並んでいる。
- ⑪2117-2280 : 第七天 (Sedes Trinitatis) 三位一体の様子が描かれる。

以下は、天のパラダイスの光の描写と至福直観を念頭に置いて、第二天、第四天、第六天、第七天の中で特筆すべきものを取り上げる。

第二天 : Ether (1827-1960)

この場所には、黄金でできた美しい壁があり、この世にあるどんな金よりも美しく輝いていた(1829-1834)。この場所にいた人々は"Holy men & wymmen"「聖人たち」(1851)で、彼らは玉座に座っていた。その場所には神の輝きがあった。

The grete bry=tenes of Goddus face
Shone amonge hem in |at place.
Hyt shone bry=ter & was more clere
Then euer shone any sonne here.

³⁵⁾ Mearns, pp.31-42 を参照。

All her here was fayr & schyre,
 Hyt semede all as hyt hadde be gold wyre;
 Crownes Jey hadde on hede, ylk one,
 Of golde & mony a precyous stone
 Of gret vertu & sere colowres --
 They semede lyke kynges or emperoures.
 So fayre crownes as Jer wer sene
 In Jys worlde hadde neuer kyng ne qwene. (1859-1870)

(神のご尊顔の偉大なる輝きが、
 その場所にいた者たちの中で輝いていた。
 この世の太陽の輝きよりも
 はるかに美しく煌めいていた。
 ここのすべては美しかった。
 すべてが黄金でできているようだった。
 聖なる男女は、金と宝石類で造られた
 高価で、色彩の鮮麗な王冠を
 それぞれの頭に被っていた。
 彼らは王や皇帝のように見えた。
 彼らはこの世の王や女王の誰ももっていない
 麗しい王冠を被っていた。)

この場所には幕屋があり、神に忠実であった修道士や修道女たちがそこに住んでいた。ここに来ることができるのは、純潔な生活を過ごした者たちで、"They shall euer in Hys ioeye ben, / For Jey shall euer God in Jey face sen." 「かれらは永遠に神の至福の地にとどまり、永久に神のご尊顔を仰ぎ見るのである」(1959-1960)というように彼らは神の御顔を仰ぎ見る至福直観の栄光を得るのである。

第四天：Firmamentum (1987-2074)

この場所には、素晴らしい音楽を奏でる楽器があったが、誰も楽器に触れることなく音楽を奏でていた。そしてこの男女の歌声は素晴らしかった。Tundale は、頭上の天空からたくさんの明るい光芒が降りそそいでくるのを見た。その光の筋からぎっしりと黄金の鎖が垂れ、鎖には銀の筋がついていた。そして、光の筋の間を黄金の翼のある無数の天使たちが飛び交い、麗しい歌をうたっていた。この作品の天の光の筋は、他の作品に比べて、極めて趣向をこらした記述である。天界の光の描写を極限まで高めた感がある。

Fro Jey firmament aboue her hede
 Come mony bryete bemes into Jat stede
 Fro Jey whych [chaynes] hengen Jykkefolde
 Shynande full bryete of rede golde.
 They hongede Jykke on yche partye,

Some wer enameled full rychelye.
 All wer ioyned & fastened [ryght]
 In wondes of syluer ryche & bry=te;
 They hongede wyth cheynes in]e ayre,
 Non er]ely sy=te was so fayre.
 Theramonge henge grette plente
 Of iewelles]at wer of grette bewte:
 Fyoles & cowpes of grete price,
 Symbale[s] of syluer & flour-de-lyce;
 Wyth syluer belles meryly]ey ronge,
 And angelles flowe ay amonge
 Wyth wynges of golde shynande bry=te,
 Non er]ely mon hath seyn suche a sy=te!
 As]e angelles flowe in]e ayre
 Amonge]e chaynes]at wer so fayre,
 Ther was such songe & suche ryngynge,
 Such melodye & such syngynge,
 And such a sy=te of rychesse,
 That ioye was mor]a[nne] mon my=te gesse. (1987-2010)

(ひとびとの頭上の天空から、
 たくさんの明るい光芒が降り注いできた。
 その光の筋からぎっしりと鎖が垂れ、
 黄金の輝きをはなっていた。
 鎖は光の筋の両側から垂れており、
 豊かな艶をもつものもあった。
 すべては白く輝く銀色の光の細枝に
 しっかりと結びつけられていた。
 細枝についた鎖は空中に垂れ、
 この世にはこれほど美しい眺めはない。
 白銀の細枝にはとても美しい宝石や
 たいへん高価な碗や杯、
 そして銀やフラ・ダ・リのシンバルが
 所狭しとさがっていたのである。
 シンバルは銀の鐘とともに陽気に鳴り響き、
 天使たちがそのあいだを飛びかった。
 光り輝く黄金の翼をはためかせながら。
 これほど美しい光景はこの世には存在しない！
 天使たちが美しい鎖のあいだを
 飛びまわっているあいだじゅう、
 歌や楽の音が響きわたり、
 旋律と歌う声が聞こえていた。
 絢爛たるこのすばらしき光景は、
 誰も想像できないほどの至福であった。)

この場所に"Pulcheryma Vyte"「麗しき霊樹」(2018)と呼ばれる大樹があった。この大樹の下で、人々は様々な声で陽気に歌をうたい、音楽を奏でていた。大樹の下には、たくさんの百合の花が咲き、種々の薬草や薬味は香水のような香りを放っている様子(2019-2036)から、パラダイスの煌びやかさのみならず、パラダイスが生命の躍動に充ちていることを知ることができる。

第六天 : Celum Angelorum (2097-2116)

Tundale と天使が宝石で造られた壁の上に登ると、そこには以下のように天使たちの九つの序列があった。

The ioe }at }ey sy=e }ore
Semede on hondredfolde more
Then all }e ioye }at }ey hadde sene
Ther }at }ey before hadde bene,
For no tonge my=th tell wyth mow}e,
}ow= he all }e wytte of }e worlde kow}e.
Ne herte my=te }enke, ne ere here,
Nor ye see wer hyt neuer so clere,
The ioye }at }er was and blysse
That God hath ordeyned for all Hys.
For }ey sy=e, as }e story telles,
The nyne orderes of angelles
That shone as bry=te as }e sonne,
And holy spyrytes smonge hem wonne;
Pryuey wordes }ey herde }er }[a]nne
That shulde be shewed to no m[a]nne. (2101-2116)

(そこに見えた至福の地は、
タンダールがこれまでに訪れた
どの至福にみちた地よりも
百倍以上もすばらしく思えた。
この絶景を語ることなどできまい、
この世のいかなる賢者であろうとも。
神が創造物のすべてに授けた
この聖なる地の至福と祝福を
誰も考えることも聞くこともできまい、
ましてやこれほどの美しさを見ることも。
というのも彼はそこに見たからだ、
太陽のように燦然と輝く
天使たちの九つの序列を。
天使たちの中には聖霊たちもいた。
そのとき秘密の言葉が語られるのを聞いた、
誰にも明かされてはならない聖なる言葉が。)

ラテン語版には、上記と同じく "nouem ordines angelorum" 「天使の九つの序列」³⁶⁾ と記されているが、Wagner によるラテン語刊本では、"angelos, archangelos, virtutes, principatus, potestates, dominationes, thronos, Cherubin, Seraphin"³⁷⁾ という具体的な九種の天使たちが列挙されている。

ここで天使の序列について若干の考察を加えたい。天使の九つの序列は、Dionysius the Pseudo-Areopagite によって確立し、Scottus Eriugena と Gregory the Great を通じて西欧世界に伝わり、Robert Hughes によれば、Thomas Aquinas は神の所業を三つに分け、各所業に三種類の天使を割り当てることによって、天使の九つの階級を以下のように体系化した。³⁸⁾

Thomas Aquinas による天使の九階級一覧表

Three kinds of God's acts	Name of angelic type	Symbolic reference to
(1) GOD'S ACTS RELATING TO HIMSELF (E.g., self-knowlegde)	Seraph	Father
	Cherub	Son
	Throne	Holy Ghost
(2) GOD'S ACTS RELATING TO UNIVERSAL CREATION	Domination	Creation
	Virtue	Preservation
	Power	Ordering
(3) GOD'S ACTS RELATING TO INDIVIDUAL BEINGS OR OBJECTS (E.g., Man)	Principality	Creation
	Archangel	Redemption
	Angel	Beatification

Aquinas のこの序列は、Wagner のラテン語刊本の序列とは異なっているが、天使のタイプは同一の見解を示しており、中世のキリスト教社会における天使論の一端を知ることができる。異界研究の視点から聖書に言及すると、幻視の中で天に昇った Isaiah の罪を燃える炭火によって贖ったのは Seraph (熾天使) のひとりであった(Isa.6:6-7)。また、人類の始祖 Adam と Eve がエデンを追われたとき、命の木に至る道を守るためにエデンの園の東側の入り口に置かれたのは Cherub (智天使) のひとりである(Gen.3:24)。³⁹⁾ Hughes は、天使の階級の機能について St. Bernard の解説を基にして以下のように述べている：

"the seraphim, cherubim and thrones are the 'intimate counsellors' of God, whilst those of the second triad (dominations, virtues, powers) are the 'government' whose will is executed by the 'minister' in the third triad, the principalities, archangels and

³⁶⁾ Mearns, p.151 を参照。

³⁷⁾ *Visio Tnugdali: Lateninisch und Altdeutsch* Herausgegeben von Albrecht Wagner (Erlangen: Verlag von Andreas Deichert, 1882), p.52 を参照。

³⁸⁾ Hughes, p.24 を参照。

³⁹⁾ Hughes, p.29 を参照。

angels."⁴⁰ 従って、上記一覧表の神の所業(3)は、神と人間の関係を述べており、神の意志は具体的に下級三隊である Principality (権天使)、Archangel (大天使)、Angel (天使)によって実行されるのである。*The Vision of Tundale*に目を移すと、異界にいる Tundaleを導いている angel は、天使の階級としては最下級の天的存在ということになる。しかし、最下級とは言っても、悪魔は決してこの angel を襲うことはできない。何故なら、"angell bright(e)"「輝く天使」(1697, 1787, 1879, 1945)という表現からわかるように、Tundaleを導く天使は光に充ちているからである。この光は神の光なのである。従って、Tundaleが"Je Dow=ter of Ly=tes"「光の娘」(1286)と呼ばれるようになった後、悪魔たちが近づけなくなったのは、彼にも神の光が彼に授けられたからである。この点からも、パラダイスの描写と光の描写が密接に関連していることが理解できる。

第七天 : Sedes Trinitatis (2117-2280)

序列に並んだ天使たちは、三位一体を仰ぎ見ている。神がいるこの天は、第七天、即ち、至高天ということになる。

Ouer J at =et J ey sawe well more
Amonge Je angelles J at wer J ore.
They sy= e Je Holy Trinite,
Godde syttyng in Hys mageste;
They behelde faste J at swete face
That shone bry=te ouer all J at place.
And Je angelles J at wer J ore
=ernede to byholde hyt euermore,
For Je bry=tenesse & Je bewte
That J ey my=te in Je face se
That seuen syJe bry=ter was in sy=te
Thenne Je sonne J at shynes so bry=te,
The whyche ys fode to angelles
And lyf to spyrytes J at Jer dwelles. (2125-2138)

(今までに見た天使の数よりも
もっとたくさんの天使がそこにいた。
天使たちは三位一体と、そして、
威厳をもって玉座についた神を仰ぎ見た。
そして、神のご尊顔をしっかりみた、
すべてを明るく照らす神の御顔を。
そこにいた天使たちは、
永久に神の御顔を仰ぎ見たいと願った。
神の御顔の中にみられる
その輝きと美しさゆえに。

⁴⁰ Hughes, p.29 を参照。

神はあかあかと輝く太陽よりも
七倍もの輝きをはなっていた。
神の光は天使たちの食物であり、
そこに住む魂たちの命の糧であった。)

Tundale は、遠くから玉座に座る神の姿を仰ぎ見た。神を見た者の目は"Maye neuer be made bylnde ne dymme"「決して霞むことも盲目になることもない」(2152)という力と能力を得ることができるという。やはり神は生命の活性化と何らかの関係を持っている。

Tundale は、この美しい場所にいつまでも住みたいと望んだが、天使は彼に現世の肉体に戻らねばならないと告げる。Tundale の魂が肉体に戻ると、彼は罪深い生活を断ち、敬虔な人生を過ごした。世俗に慰めを求めることなく、罪滅ぼしの苦行をして生活した。祈りのため、貧しい人々に全財産を与えた。こうして彼は神が望む生活をした。そして、彼は天へと召されたのである。Tundale は異界の経験をする以前は罪深い人物であった。恐らくそのまま一生を過ごしていたならば、死後は悪魔たちの餌食になっていたであろう。しかし、彼は神の慈悲を受け、生前中に幻視によって異界の経験をすることができたのである。

4. パラダイスの光と至福直感について

小論で取り上げた作品を通してみると、神のいる場所はパラダイスの最上層に位置する至高天である。そして、神の光がこの至高天を明るく照らしている。このことから、神の姿よりも光の描写が重視されている印象を受ける。ここで少し光について考察したい。光は中世思想の宇宙論において特殊な意味を帯びていた。例えば、新プラトン主義哲学では、光は以下のような特殊性を持っている。

According to Neoplatonic philosophy, light is not something material like the four elements but a force that shapes and gives form to things. Sometimes it was said to be something divine—an emanation from God. Brilliance is not a property of objects but something they possess because they participate in God, the divine light.⁴¹⁾

即ち、光は四大元素ではなく、物質を形成する神の力である。そして、物体の輝きは、物体が所有する物ではなく、物体が神と関係がある故に所有している物、つまり物体の輝きは神的な性質をもつ光である。この光は、Thomas Aquinas が思考した第五元素を我々に想起させる。⁴²⁾このように考えるならば、異界で描写される光は、太陽が発する光とは

⁴¹⁾ McDannell, p.83 を参照。

⁴²⁾ *Dictionary of the Middle Ages*, vol.9, p.397 を参照。

全く異なる次元の神性を帯びていると言えよう。また、Robert Hughes は、Dante の *Paradiso* の至高天における光について、以下のように述べている。

The medium whereby God transmits the energy and motion of his love to the universe, by means of his angels, is light: *luce intelletual, pena d'amore*—the light of the intellect, filled with love. Light belongs to the intellect in a double sense. First, it is the supreme attribute of God, whose wisdom is the fount and model of all human understanding. Secondly, most knowledge is gained by using one's eyes—reading and looking—and only light makes this possible. ⁴³⁾

このように神の光は愛や知性とも関係している。そしてこの関係は「見る」という行為によって生じる。Tundale のパラダイスでの体験にもこの点と類似する記述がある。例えば、光り輝く三位一体が見えた高い壁から下方に目をやると、彼がそれまでに見てきた総ての場所を一望することができた。つまり、地獄から天のパラダイスに至るあらゆる人間の姿を俯瞰できたのである。そして、"Of all þyng Tundale hadde knowynge þore, / Hyt was no myster to learne hym more" 「タンダールはここですべてを知ると、それ以上に知る必要はなくなった」(2161-2162)という記述から、Tundale の知性は、現実の世界では知ることができない真実を見て知ることができた故に最高潮に達したと理解できる。

以上のように、異界における光については種々の意味づけが可能である。しかし、これまでに考察したように、小論で取り上げた作品のパラダイス描写の光は、生命や癒しとの関係が特に強調されていると思われる。繰り返しになるが、*St. Patrick's Purgatory* では、天から降りそそぐ光の筋が魂の糧となる (183-185)⁴⁴⁾という記述があり、*The Revelation of the Monk of Eynsham* においてもやはり主人公は、光につつまれた神の姿を見上げて生命の充足を感じている。更に、*The Vision of Tundale* では"The whyche ys fode to angelles / And lyf to spyrytes þat þer dwelles" 「神の光は天使たちの食物であり、そこに住む魂たちの命の糧であった」(2137-2138)という記述も見られる。即ち、これらの作品におけるパラダイスの神の光は「生命の根源」と言い換えることも可能であろう。従って、諸作品のパラダイス描写における至福直感も神の光、即ち、生命と関連づけて考えるべきであると思われる。この点から、小論で取り上げた作品が語るパラダイス描写の視点について、至福直感を基に以下のように呈示したい。即ち、その視点とは、異界 (パラダイス) という場所設定の中で、生命の本源である光を霊的視力で直視することによって神の生命力が個々の魂の中に芽生え、そのことから生じる神との一体感の喜びを描いているという点である。

⁴³⁾ Hughes, p.114 を参照。

⁴⁴⁾ Easting, *St Patrick*, p.31-32 を参照。

結語

最後に、小論で取り上げた作品は中世社会の多くの文献のほんの一部であるが、当時の人々のパラダイスに対するひとつのイメージを理解できたのではないだろうか。現代の我々から見れば、天のパラダイスへの旅は、非現実的で荒唐無稽である。しかし、初めに指摘したように、中世キリスト教社会では、地上および天のパラダイスの存在は極めて現実味を帯びた理想郷であったのである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 23520353 の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表す。

[On the Viewpoint of Descriptions of Paradise in Medieval Dream-Visions]

[Mibu, Masahiro・福岡歯科大学教授・イギリス文学・比較思想・夢幻視文学における異界研究]